

2024年 4月13日 フランス語学会 例会
於 京都大学 吉田南総合館南棟 334 演習室

フランス語一人称小説における現在形の意義にまつわる事例研究
-*Le diable au corps* を題材として-

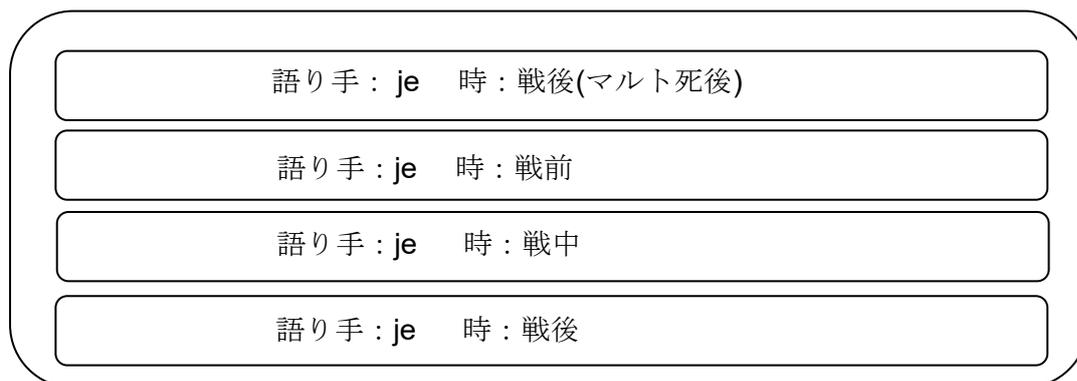
東京大学総合文化研究科 博士課程 1年
高久真由美

はじめに

Le diable au corps (以下、『肉体の悪魔』)は1923年に Raymond Radiguet(1903-1923)によって書かれた、1902年から1919までの青年の体験を記した一人称小説である。内容は「第一次世界大戦下において、15歳の僕<je>が、夫が出兵中の19歳の人妻マルトと恋に落ち、不義を重ねる。やがてマルトは妊娠し、大戦も終わる。マルトは男の子を出産後亡くなる。僕<je>は息子が帰還したマルトの夫によって無事育てられていくことを知る。」と要約できる。作中、語り手<je>の名および登場人物<je>の名は一貫して記述されない。テキスト全体の特徴として、第一に時間の省略が頻発していることが指摘できる。エピソードごとの持続もまちまちで、叙述の速度に関する Genette の用語でいうところの情景法や省略法が入り乱れている。第二に終始<je>の名が明らかにされないことや僕の容姿を描写しないことから読者と語り手の視点が重なりやすくなっていることが挙げられる。

Karakul(2008)では『肉体の悪魔』を Greimas の行為論に基づいて登場人物ごとの{主体, 送り手, 対象, 受け手, 援助者, 敵対者}の関係について分析している。Karakul はテキストにおける語り手の内焦点化を指摘し、その特徴として、まず語り手は本当の感情について後から知ること、第二に語り手が間違っているかもしれない印象に頼っていること、第三に語り手が仮説を立てるための手順を踏んでいること、第四に語り手が純粋な心理的説明をしていること、を挙げている。加えて、Karakul は「戦争中の」「パリで」「恋愛の情熱に基づいた行動」の物語であり、フランス古典演劇の三一一致の法則に基づいた時の単一・筋の単一・場所の単一を遵守して書かれているということも指摘した。そしてテキストの構造と時制の使用について Weinrich の影響を受け、また語り手の経験が作者 Radiguet の実体験を色濃く反映していることもふまえて「単純過去で示される登場人物としての語り手、半過去で示される書き手としての語り手、そしてそれらの背後に作者が存在する」という指摘がなされている。しかし作中、頻度は少ないながらも現在形の使用例が散見される。物語を過去形の動詞を用いて記述することは一般的なのだから、『肉体の悪魔』のテキストを分析するうえで肝要なのは、使用が比較的稀な現在形だと考えられる。作者が情報を組み立て直し推敲し、時制や叙法を選択して有効的に使ったテキスト中、現在形がどんな役割を担い、いかなる効果が生み出されているのか検討し、現在形の表現可能性について吟味する。

全体の構造



テキスト全体の構造は、上の図のようになっている。語り手の現在の世界に生きる<je>が、戦前の1913年から戦後1919年まで6年間の出来事を振り返る。年上の恋人マルトと出会うのは戦中の1917年で、1918年9月に最後に直接会うことになる。以後手紙でやり取りを行い、1919年1月に早産の男児が誕生し、マルトが死亡する。マルトの死亡後に夫のジャックを初めて目にした場面で物語は終わる。

現在形にまつわる先行研究

①フランス語学における現在形の先行研究

・Serbat(1980,1988)

形態論的根拠と意味論的根拠からフランス語の直説法現在には時間についてもアスペクトについても意味を持たず、文脈によってその価値が定まるという説を示し、現在形の総称読みを説明した。総称読みとは、どの時間にも区分にも区切られず恒常的に真になる事行を表す。過去の出来事を表す現在形によって生じる眼前描写の効果は時制を返還することから生じる副次的効果だととらえる。

・岸(2008)

前述の総称読みに対して、特定の時点に限定された事行を表す発話時現在読みについて、Recanati(1980)の domain of discourse や、Carlson(1980)の indivisual と stage という概念を用いて検討し、いかなる時間区分とも矛盾しないはずの現在形が hier と共起しにくい理由を説明した。発話時現在読みとは話者が事行を見ている時点でしか真にならず、ほかの時点での事行の生起文の真偽値に影響しない文である。

・井元(2014)

Fauconnier(1984)のメンタルスペース理論と Cueter(1994)の時制論に基づき、日英仏語の時制、特に歴史的現在を比較している。Serbat 以来の現在形が無標であるという説に異論を唱えている。井元はスペースを「述定の対象となる最小の心的表象が存在し、述定による属性を保持している考えられる領域」と定義したうえで、BASE(話し手が言語活動を行っている想定されるスペース)、V-POINT(定形動詞が表すイベントが描かれたスペースに、直接テンス素性を与えるスペース)、FOCUS(話し手が定形動詞によって表現したい表現意図の中心がおかれ、命題の真偽値が計算されるスペース)EVENT(定形動詞が表しているイベントがおかれるスペース)の4つのスペースを想定する。「FOCUS が BASE と時間軸上に同じ位置にあるか、前(過去)ではない位置にあることを表す時制形式」を現在形と定義したうえで、フランス語の直説法現在形を「BASE・V-POINT から、時間的に同じか後の位置

に FOCUS・EVENT を設定する」と定義した。そして、過去の事態を表現している現在形が、現在形の非時間性によって可能になっているのか、BASE が何らかの理由で過去にあるから現在形が用いられていると考えるのが妥当なのか吟味した。フランス語では BASE の移動が英語に比べ自由であり、この BASE の位置の移動に関する制約の緩さに、Serbat の非時間説が生まれる余地も一部認めている。井元は英仏語に共通の歴史的現在形の特徴として以下の3つを挙げている。

1. 文体的に有標であり、修辭的効果がある
2. 状態性の動詞より、動作性の動詞が多い
3. 現在形は連続して用いられる傾向がある

フランス語の歴史的現在にはこのような特徴があるから、BASE との関係は保持されており、BASE・V-POINT から、直説法在形は時間的に同じか後の位置に FOCUS・EVENT を設定するという時制的価値を積極的に示す標識であるとしている。

②小説における現在形の先行研究

・Weinrich(1964)

テキストのために時制が果たすものとはなにか、という問いを立て、時制は時間とは直接のかかわりを持たないという前提のもと、発話の態度・発話の方向・浮き彫りという3つの指標に基づいた時制理論を Maupassant(1850-1893)『遺言(*Le Testament*)』(1883)や Camus(1913-1960)『正義の人々(*Les Justes*)』(1949)など複数の文学テキストに適用した。発話の態度では説明の時制(現在,未来,複合過去)と語りの時制(半過去,単純過去など)を区別した。発話の方向ではテキスト時間と行為時間の差から回顧時制(複合過去,大過去など)、ゼロ段階(現在,半過去,単純過去),予見時制(未来,条件法)に分類した。浮き彫りでは半過去を背景の時制、単純過去を前景の時制と分類した。

・青柳(2017)

アルジェリアのフランス語非母語話者ムルド・フェラウン Mouloud Feraoun(1913-1962)による『貧者の息子(*Le Fils du pauvre*)』(1950)を題材に現在形の使用例を精査している。このテキストは主に三人称叙述で記述された自伝である。小熊(2014)に基づき、現在形には①継続 ②習慣 ③未来 ④近接過去 ⑤実況中継 ⑥普遍的 ⑦物語叙述の役割があるとしたうえで、テキスト上の使用例を以下の4種類に分類した。なお前記7種のうち①-④は無時間的用法、⑤-⑦は井元がいうところの歴史的現在、つまり通常過去形で示す叙述である。

[A]語り手表出の現在形：語り手からのコメント、および語り手自身に関する言及を行う場合(①~④)

[B]一般的真理の現在形：格言や普遍的真理、一般論を提示する場合(⑥)

[C]物語叙述の現在形：物語世界の出来事や状況を現在形で叙述する場合(①~④,⑤)

[D]自由話法の現在形：登場人物の声をそのまま地の文が伝える場合(①~④,⑦)

『肉体の悪魔』は語り手の過去を語る一人称小説であり、歴史的現在を含む多様な用例における選択されている現在形には各々一定の役割と効果があると考えられる。

以下、現在形は青柳(2017)のA~Dの分類に基づき『肉体の悪魔』テキスト中の現在形の使用例の役割を検討し、そこから派生する効果について吟味する。

テキスト中の現在形の使用例の分析

一人称の語り手が過去の自分に起きた出来事を振り返るという構造上、テキスト全体は主に半過去と単純過去で記述されている。まず冒頭に、物語全体を通して過去を回想する起点である語りの現在が生じている。引用(1)からは、地の文において **Je** を主語として近接未来形、現在形が用いていること、**mes camarades** を主語として単純未来形を用いていることが確認できる。

引用(1) **Je vais encourir bien des reproches. Mais qu'y puis-je ? Est-ce ma faute si j'eus douze ans quelques mois avant la déclaration de la guerre ? Sans doute, les troubles qui me vinrent de cette période extraordinaire furent d'une sorte qu'on n'éprouve jamais à cet âge ; mais comme il n'existe rien d'assez fort pour nous vieillir malgré les apparences, c'est en enfant que je devais me conduire dans une aventure où déjà un homme eût éprouvé de l'embarras. Je ne suis pas le seul. Et mes camarades garderont de cette époque un souvenir qui n'est pas celui de leurs aînés. Que déjà ceux qui m'en veulent se représentent ce que fut la guerre pour tant de très jeunes garçons : quatre ans de grandes vacances.**¹

訳(1) 僕はさまざまな非難を受けることになるだろう。でも、どうすればいい？戦争の始まる何か月か前に一二歳だったことが、僕の落ち度だとでもいうのだろうか？あのとんでもない時期に僕に降りかかった災厄は、ふつう一二歳という年齢ではまず経験しないものだ。見かけの変化はともかくとして、僕たちをいきなり大人にするほどの力を持つものなど存在しないのだから、一人前の男だって途方に暮れるような出来事のなかで、僕は子供として振舞うほかなかった。僕だけがそうしたわけじゃない。そう、僕の友人たちだって、あの時期に関しては、年上の人びとは違う思い出を持ち続けるにちがいない。いまからもう僕を無責任だと言っている人びとには、多くの幼い少年にとって、あの戦争が何であったのかを想像してほしい。あれは、四年間の長い夏休みだった。²

この引用(1)は語り手<je>の現在の思考を表し、青柳の分類のうち[A]語り手表出の現在形に該当すると考えられる。

次の引用に移る。

引用(2) **Mais vers le vingt août, ces jeunes monstres reprennent espoir. Au lieu de quitter la table où les grandes personnes s'attardent, ils y restent pour entendre mon père parler de départ.(...) Mes frères plaisantent ma petite sœur.(...) Tandis que chacun s'étonne, je découvre enfin les mobiles de ce patriotisme : un voyage à bicyclette ! jusqu'à la mer ! et une mer plus loin, plus jolie que d'habitude.**³

訳(2) でも、八月二十日ごろ、悪童たちは希望をとり戻した。大人たちが居残っている食卓から離れずにいたら、そこで父が疎開の話をするのを聞いたのだ。(…)弟たちは 一番年下の妹をからかった。(…)みんな妹や弟たちのやる気に驚いていた

¹ Radiguet(1923)p.501

² 中条(2017)p. 6

³ Radiguet(1923)p.504

が、僕はようやくこの愛国心の理由を知った。自転車旅行ができるからだ！しかも海まで！いつもの海よりずっと遠くて、きれいな海だ。⁴

引用(2)は過去の出来事であるにもかかわらず現在形を用いることで、語りの現在の<je>と登場人物<je>の視聴覚や思考が共有され、臨場感が高まり、また時間の経過がわかりにくくなっている。青柳による分類に当てはめれば、[C]物語叙述の現在形であり、眼前描写の機能を有すると考えられる。

引用(3) **Mes sœurs, maintenant, allaient à J... porter des paniers de poires aux blessés. Elles avaient découvert un dédommagement, médiocre, il est vrai, à tous leurs beaux projets écroulés.**⁵

訳(3)というわけで、妹たちはいまや、負傷兵に配るために梨を籠につめてJ駅に運んでいた。(…)くだらないと言われればそれまでだが、梨を運ぶことにその埋め合わせを見出したのだ。⁶

引用(3)以降は戦争が始まってから後の出来事を示す。引用(3)は、疎開の予定がなくなって暇になり、梨を運ぶことで立ち消えた自転車旅行の埋め合わせをする妹について解説している箇所である。il est vrai という挿入が現在形でなされており、形式主語を用いて語りの現在と物語世界のつながりが生じている。[A]語り手表出の現在形に該当し、挿入句・導入的な表現によって語り手の存在を明らかにしている。

戦中、1915年春から1917年の部分では募金活動という口実で女の子や仲間たちと遊びまわることを覚えた登場人物<je>が描かれている。ルネという親友ができたこと、そのルネとともにアンリ四世校に通い始めたことが確認できる。この箇所において、語りの現在からの振り返りが複数の文に見て取れる。以下の引用(4)はその代表的な例である。

引用(4) **Je connus donc que personne n'échappe à son âge, et que mon dangereux mépris s'était fondu comme glace dès que quelqu'un avait bien voulu prendre garde à moi, de la façon qui me convenait.**⁷

訳(4)僕は、人間誰も自分の年齢から逃れられないことを知ったし、僕に適したやり方で面倒を見てやろうと考えてくれる仲間ができたことで、僕のなかにある危険な軽薄癖が氷のように解けてしまったことを知った。⁸

誰も年齢から逃れられないという一般論を示す部分で現在形を用いることで語り手の現在の思考と引用(4)のエピソードにおける登場人物<je>の行為が仲介される。[B]一般的真理の現在形に該当する。

引用(5)ではマルトと初めて出会った1917年4月ごろの父と僕と弟妹達のオルムソンへの散策の習慣が描写されている。

引用(5) **La belle saison venue, mon père aimait à nous emmener, mes frères et moi, dans de longues promenades. Un de nos buts favoris était Ormesson, et de suivre le Morbras, rivière large d'un mètre, traversant des prairies où poussent des fleurs qu'on ne rencontre nulle part ailleurs, et dont j'ai oublié le nom. Des touffes de cresson ou de menthe cachent au pied qui se hasarde l'endroit où**

⁴ 中条(2017)pp.15-16

⁵ Radiguet(1923)p.509

⁶ 中条(2017)p.26

⁷ Radiguet(1923)p.510

⁸ 中条(2017)pp.28-29

commence l'eau. La rivière charrie au printemps des milliers de pétales blancs et roses. Ce sont les aubépines. ⁹

訳(5)美しい季節がやって来ると、父は僕と弟たちを長い散策に連れだすことを好んだ。僕たちが気に入っていた目的地のひとつはオルムソンで、川幅一メートルほどのモルブラ川に沿って進み、野原を通り抜ぬけていくと、名前はもう忘れてしまったけれど、ほかのどこでも見たことのない花々が咲いていた。クレソンやミントの茂みに覆われた場所に思いきって足を踏みだすと、そこに水源が隠されていることもあった。春には、この川は無数の白とばら色の花びらを浮かべて流れた。さんざしの花だった。 ¹⁰

引用(5)の冒頭は半過去が用いられている。語りの現在の<je>を主語に花の名前を忘れてしまったことを複合過去で表しつつも、情景を不定代名詞 **on** や関係代名詞 **où**、名詞句、形式主語 **ce** などを主語として現在形で示すことで、過去の出来事であるにもかかわらずあたかも語りの現在において現前している風景のような描写がなされている。[C]物語叙述の現在形に該当する。

引用(6)付近ではマルトは登場せず、登場人物<je>の両親が僕とマルトの不義の恋愛をどうとらえていたかが記述される。父は<je>の恋を応援している一方、母は不快に思っていた。人のうわさを気にする母の性分がいかに形成されたか、出身地でスキャンダルがいかに広まっていくかが現在形で描写される。

引用(6) **Dans toutes ces petites villes de banlieue, du moment qu'elles s'éloignent de la banlieue ouvrière, sévisent les mêmes passions, la même soif de racontars qu'en province. Mais, en outre, le voisinage de Paris rend les racontars, les suppositions plus délurés. Chacun y doit tenir son rang.** ¹¹

訳(6)大都市郊外の小さな町では、たがいに無関心な工場労働者の住む地域を一步でも離れれば、地方と同じく、根も葉もない噂話への飢えるような情熱が猛威をふるう。そのうえ、パリに近いだけに、噂話やスキャンダルはいっそう刺激的な色彩を帯びていく。身のほどを弁えぬ行為は断罪される。 ¹²

語りの現在の<je>も登場人物の<je>も行為者としては登場しないが、現在形を用いて町の体質を示すことで語りの現在の<je>をとりまく社会と、物語世界内の<je>が直接経験していない社会をつなぎ合わせ、登場人物<je>の伝聞経験や母親の体験を含みこむことでテキスト全体に奥行きを出している。[B]一般的真理の現在形に該当すると考えられる。

引用(7)付近は登場人物<je>とマルトが恋愛中の1918年6月の出来事で、夫の病を知らせる手紙が届くが夫に会いに行くのを渋るマルトを説得するエピソードである。エピソードの最後にマルトと「僕」が似た者同士になっていることを指摘する以下のような現在形による分析が挿入されている。

引用(7) **Sans doute, sommes-nous tous des Narcisse, aimant et détestant leur image, mais à qui toute autre est indifférente.** ¹³

⁹ Radiguet(1923)p.511

¹⁰ 中条(2017)p.31

¹¹ Radiguet(1923)p.554

¹² 中条(2017)pp.98-99

¹³ Radiguet(1923)p.557

訳(7)たぶん僕たちはみなナルシスなのだ。水鏡に映った自分の姿を愛することもあれば憎むこともあるが、他人の姿は目に入らない。¹⁴

引用(7)では比喩表現に現在形を用いることで、語りの現在の<je>の発言である可能性と登場人物のとしての<je>の発言の可能性の双方考えられる。青柳の分類枠組みに基づき言い換えれば、[A]語り手表出の現在形と[D]自由話法の現在形のどちらでもあると考えられる。なお作中比喩が多発するが、必ずしも現在形が用いられるわけではなく、以下の引用(8)のような半過去を用いた例も存在する。登場人物<je>と父が家で<je>の不倫に関して喧嘩する場面で、登場人物<je>と父の喧嘩の日々が近づいていることを語り手<je>が嵐に例えている。

引用(8)L'orage approchait.¹⁵

訳(8)嵐が近づいていた。¹⁶

次の引用(9)は 1918 年 7 月 12 日のエピソードで、マルトが夫に会いに出発した後、実家での登場人物<je>と家族のやり取りが描かれている。

引用(9)Je regrettais qu'on ne pût mourir d'ennui, ni de peine. Peu à peu, ma tête se vidait, avec un bruit de baignoire. Une dernière succion, plus longue, la tête est vide. Je m'endormis.¹⁷

訳(9)退屈でも苦悩でも死ぬことができないのは残念だった。そのうち浴槽の水が抜けるような音とともに、頭が空になっていった。最後にもっと長々と吸いこまれるような感じがして、頭は空っぽになった。僕は眠っていた。¹⁸

引用(9)において、単純過去で示される 眠る(m'endormis)という行為の直前の描写が、半過去を用いた比喩(ma tête se vidait)から現在形を用いた比喩(la tête est vide)へと移り変わることで、時間・空間感覚の欠如が表現されている。[D]自由話法の現在形に当てはまると考えられる。

引用(10)付近ではマルトの不在中に彼女の友人のスヴェアという少女と出会い、僕がマルトの家で浮気するエピソードが描かれている。

引用(10) Qu'on ne condamne donc pas trop vite certains hommes capables de tromper leur maîtresse au plus fort de leur amour ; qu'on ne les accuse pas d'être frivoles. Ils répugnent à ce subterfuge et ne songent même pas à confondre leur bonheur et leurs plaisirs.¹⁹

訳(10)だから、恋愛の絶頂期に恋人をだますことができる男たちを性急に非難したり、浮気性だといって責めたりしないでほしい。彼らは逃げ口上が嫌いだし、幸福と快楽を混同する気はさらさらないのである。²⁰

[B]一般的真理の現在形と考えられる引用(10)において、登場人物<je>が浮気するという行動について、je ではなく on や ils といった不定代名詞や三人称複数を用いて一般化し現在形で記すことで、語り手の現在と登場人物<je>をつないでいる。

¹⁴ 中条(2017)p.139

¹⁵ Radiguet(1923)p.577

¹⁶ 中条(2017)p.175

¹⁷ Radiguet(1923)p.562

¹⁸ 中条(2017)p.144

¹⁹ Radiguet(1923)pp.567-568

²⁰ 中条(2017)p.157

引用(11)は病のマルトを彼女の実家に送り届けた後、登場人物<je>が実家で過ごす場面である。マルトと最後に直接会った場面で、戦中の最後の記述である。

引用(11)Ma mère remarqua que j'avais les yeux rouges. Mes sœurs rirent parce que je laissais deux fois de suite retomber ma cuillère à soupe. Le plancher chavirait. Je n'avais pas le pied marin pour la souffrance. Du reste, je ne crois pouvoir comparer mieux qu'au mal de mer ces vertiges du cœur et de l'âme. La vie sans Marthe, c'était une longue traversée. Arriverais-je ? Comme, aux premiers symptômes du mal de mer, on se moque d'atteindre le port et on souhaite mourir sur place, je me préoccupais peu d'avenir. Au bout de quelques jours, le mal, moins tenace, me laissa le temps de penser à la terre ferme. ²¹

訳(11)母は僕の目が赤いことに気づいた。妹たちは、僕が二度も続けてスープ用の匙を落としたので笑った。床がぐらぐらと揺れていた。苦しくて真っ直ぐに立ってられない。じっさい、この心と魂のめまいを説明するのに、船酔いより適切な表現はなかった。マルトのいない人生は、長い航海だ。僕は目的地に着けるのか？船酔いの初めの兆候が出たときには、港に着くことなどどうでもよくなり、その場で死んでもいいと思うものだ。それと同じで、僕は未来のことなど気にもかけなかった。だが、数日経って、船酔いが治まってくると、僕はしっかりと陸地に立つことを考える余裕ができた。 ²²

めまいと船酔いを重ね合わせ、単純過去や半過去、条件法を用いて描写する合間に、船酔いにまつわる一般論が on を主語に現在形で挿入される。過去時制に [B]一般的真理の現在形を挟むことで、時間の経過を曖昧にし、かつ物語世界の時間と語りの現在の時間をつないでいる。

「ある日の正午」、学校から帰ってきた弟に、マルトが死んだと知らされることになる。衝撃のあまり僕は気を失い、その後数日間はトラウマから正午頃弟が玄関にいると気を失うようになってしまった。引用(12)はその直前の記述である。このマルトの死付近から『肉体の悪魔』の最後まで現在形が頻出する。

引用(12)Notre maison respirait le calme. Les vrais pressentiments se forment à des profondeurs que notre esprit ne visite pas. Aussi, parfois, nous font-ils accomplir des actes que nous interprétons tout de travers. (Je me croyais plus tendre à cause de mon bonheur et je me félicitais de savoir Marthe dans une maison que mes souvenirs heureux transformaient en fétiche.) Un homme désordonné qui va mourir et ne s'en doute pas met soudain de l'ordre autour de lui. Sa vie change. Il classe des papiers. Il se lève tôt, il se couche de bonne heure. Il renonce à ses vices. Son entourage se félicite. Aussi sa mort brutale semble-t-elle d'autant plus injuste. Il allait vivre heureux. De même, le calme nouveau de mon existence était ma toilette du condamné. ²³

訳(12)僕の家は静けさに満ちていた。真の予感(予感)は精神の理解できない深みで作りだされる。だから、予感に従って行った行為を、僕たちはまったく間違っ(誤)って解釈してしまうのだ。(…)死期の近づいた(近づく)だけ(だけ)ではない人間は、そのことに気づいた(気づく)わけでも

²¹ Radiguet(1923)p.584

²² 中条(2017)p.189

²³ Radiguet(1923)p.590

ないのに、突然、身辺整理を始めるものだ。生活が一変する。書類を仕分けし、早寝早起きし、悪習を断つ。まわりの人びとはそれを喜ぶ。それだけに、突然の死は何とも理不尽なものに思われる。これから幸せに生きようとしていたのに。それと同じく、僕の新たな生活の平穏さは、死に者の身辺整理だった。²⁴

マルトの死を記述する直前に、語り手<je>がマルトの死を振り返っている。[A]語り手表出の現在形、もしくは[B]一般的真理の現在形と考えられる。

引用(13)はマルトの死後、死を悼む心情の記述である。

引用(13) *Marthe ! Ma jalousie la suivant jusque dans la tombe, je souhaitais qu'il n'y eût rien, après la mort. Ainsi, est-il insupportable que la personne que nous aimons se trouve en nombreuse compagnie dans une fête où nous ne sommes pas. Mon cœur était à l'âge où l'on ne pense pas encore à l'avenir. Oui, c'est bien le néant que je désirais pour Marthe, plutôt qu'un monde nouveau où la rejoindre un jour.*²⁵

訳(13)マルト！死のあとには何もないことを願っているのに、僕の嫉妬は墓のなかまできみを追いかけている。自分のいないパーティで愛する人が大勢のとり巻きに取り囲まれているのが耐え難いと同じことだ。僕の心はまだ未来の事なんか考えない年齢だった。そうだ、僕がマルトのために望んでいたのはすべて消してくれる無だ。いつの日かまた一緒になれるもうひとつの世界なんかじゃない。²⁶

引用(13)は呼びかけで始まり現在形と半過去形が混在し、語りの現在の<je>の思考と登場人物<je>の思考の境界が曖昧になっている。[A]語り手表出の現在形、[B]一般的真理の現在形、[D]自由話法の現在形のどれか判別が困難である。

最後の引用(14)はマルトの死から数か月後の場面である。マルトの絵を見に僕の家を訪れた夫ジャックを見、僕は子どもがジャックによって育てられていくことを実感して物語は終わる。

引用(14) *En voyant ce veuf si digne et dominant son désespoir, je compris que l'ordre, à la longue, se met de lui-même autour des choses. Ne venais-je pas d'apprendre que Marthe était morte en m'appelant, et que mon fils aurait une existence raisonnable ?*²⁷

訳(14)妻を亡くし、これほど誇り高く絶望を克服する男を見て、いつかは世の中の秩序が自然に回復していくことを悟った。マルトが僕の名を呼びながら死んだこと、そして、僕の息子がまともな生活を送るだろうということ、それをたったいま僕は知ったのだから。

引用(14)の後半では半過去によって登場人物<je>の思考であるとわかる一方、前半の文では<à la longue>と現在形の共起によって、主語<l'ordre>ひいては登場人物<je>の未来を表すと考えられ、その未来は語り手の現在とも地続きになっている。物語世界の出来事や状況を現在形で叙述する場合に用いる[C]物語叙述の現在形のうち、未来を表す役割を与えられていると考えられる。

²⁴ 中条(2017)pp.201-202

²⁵ Radiguet(1923)p.591

²⁶ 中条(2017)p.203

²⁷ Radiguet(1923)p.591

結論

『肉体の悪魔』では、現在形を用いて

- ① 語り手<je>の現在を表現 ((1)(3)(12)(13))
- ② 語り手<je>と登場人物<je>の思考の接近・統合((2)(9))
- ③ 語り手<je>と登場人物<je>の認知(視覚, 聴覚, 時間感覚など)を接近・統合((2)(5)(9)(11))
- ④ 主語を不定代名詞や形式主語, 普通名詞とすることで登場人物としての<je>の私的な体験を基盤としながらも総称文を生成((4)(6)(7)(10)(11)(12)(14))
- ⑤ 語りの現在に近づくとつれて頻度を増やすことにより語りの現在と物語世界の時間の統合((12)(13)(14))

を実現している。

これらの効果により、『肉体の悪魔』における現在形の使用は、複雑で長期的なシナリオにまとまりを与え、物語の統一性に寄与する効果があると考えられる。

また、先行研究で挙げた井元の歴史的現在の3つの特徴(1. 文体的に有標であり、修辭的効果がある/2. 状態性の動詞より、動作性の動詞が多い/3. 現在形は連続して用いられる傾向がある)のうち、傾向2,3についての反例(11)があることが確認できた。さらに、テキスト全体の構造が現在形の意味の決定にかかわる可能性が示された。

今後の展開

使用例を分析するなかで、現在形で述べることで複数の主体が重なり合っているような印象を与えることが確認された。この現象は、Bakhtinに端を発するポリフォニー理論に通じうる。ポリフォニーとは発話文および発話文の連鎖の中に複数の異質の言語主体の「声」(voix)を認める考え方である。今後、文学テキストを対象としてフランス語直説法現在形とポリフォニー理論の関係について吟味したい。

参考文献

- 青柳悦子(2017)『貧者の息子』の語り(1)物語における現在形の多様な効果, 文藝言語研究 71, pp.1-69
- Chloé Radiguet (2012), *Raymond Radiguet Oeuvres, complètes Omnibus*
- 中条省平訳(2008)『肉体の悪魔』光文社古典新訳文庫
- Gérard Genette(1972) *Discours du récit, essai de méthode*, in *Figures3*, Seuil 『物語のディスコース 方法論の試み』花輪光訳,1985,水声社
- Harald,Weinrich(1977)*Tempus. Besprochene und erzählte Welt. 3. Auflage.*Verlag W. Kohlhammer, 『時制論 文学テキストの分析』脇坂豊 大瀧敏夫 竹島俊之 原野昇 共訳,1982, 紀伊国屋書店
- 髭郁彦,川島浩一郎,渡邊淳也(2010)『フランス語学概論』駿河台出版社
- 井元秀剛(2014)『フランス語における現在形の特徴』フランス語学の最前線 2,pp295-330,ひつじ書房
- Karakul, Songlül Aslan (2008) *Procédés narratifs dans le Diable au corps de Raymond Radiguet: une approche sémio-linguistique*, Université Hacettepe.
- Karakul, Songlül Aslan (2018) Point de Vue Interne du Diable au Corps de Raymond Radiguet, *Mediterranean Journal of Humanities*
- 岸彩子(2008)『時点の差を捨象する現在形』,関西フランス語フランス文学 14 卷, pp. 3-14
- 小熊和郎(2014)『フランス語における現在形の特徴』フランス語学の最前線 2,pp249-294,ひつじ書房
- Serbat,Guy(1980)La place du présent de l'indicatif dans la système des temps. *L'information grammaticale* 7 :36-39. Peeters.
- Serbat,Guy(1988)Le prétendu présent de l'indicatif,-une forme non déictique du verbe. *L'information grammaticale* 38 :32-35.Peeters.
- 渡邊淳也(2014)『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社